

昨年は、1年半を費やし、最先端のバイオ医薬品等に関する上下巻合わせて約1000ページの書籍を監修者としてまとめ上げた。

また、65年来WHOや各国政府、米・英・仏・独などバイオ関連のトップ研究所と提携し、活動している国際バイオ医薬品等連盟（IABS）の遺伝子治療・細胞治療委員会委員長としてロサンゼルスでの国際学会の成功に続き、東京で国際学会を準備中とのこと。

さらに、iPS細胞由来の加齢黄斑変性症に対する治療細胞、重症心不全症に対する心筋細胞、角膜疲弊症に対する角膜細胞などの臨床適用可否の審査委員長の役割も果たしている。

ただ、「本当に楽しいのは、数多ある趣味・娯楽と、近大で始め、現在も若手が悪戦苦闘している幹細胞研究の話をするとき」だそうだ。

徳島県は糖尿病による死亡率が全国で2番目に高いという残念な順位がある。早川さんの研究分野・バイオ医薬品のなかで、20世紀最大の医薬品開発

ともいわれるのが糖尿病の治療に不可欠なインスリンだ。

「カナダで膵臓からの抽出物が血糖値を下げることを発見したのが1921年。豚など動物由来のものから、1982年に遺伝子組換え技術を用いたヒトインスリンができ、アレルギー反応などの副作用が激減した」

つまりこの間、60年。長い年月が必要だったのだ。が、再生医療がさらに進化すれば、膵臓のランゲルハンス島も作ることは不可能ではないという。

「そのモデルになるもの、ひな型はそこそこあります。完成度は別にして。腎臓も理論的にいえば作れないわけではない。細胞から作れば他人の腎臓をもらわないで済むわけです」

再生医療や遺伝子操作が進歩して、寿命がこれまで以上にさらに延長できる時代は来るのだろうか。

「例えばコピー機で、コピーを繰り返し返すとズレが生じ、最初とは違ってきますよね。体を作る細胞・臓器や生命現象の設計図である遺伝子の複製では、ほんのわずかなズレがあっても元通りには復元できなくなることが

必ず起こります。これが加齢現象や寿命の限界と関係しており、避けられません」

最先端の話は果てなく深く、広く、だからこそ早川さんの研究心をかき立てて止まないのだろう。AI時代におけるより大事なことは個性の発揮。それぞれの命が輝くための理想は寿命と健康寿命が一致すること。「病気に苦しむ人たちが再生医療で健康寿命を全うできるようになれば」という。

趣味を兼ねて国内外を旅する。1年の4分の1は海外のホテル泊。マイルージも12万マイルに達したそうだ。

「私の理想はピンピンコロリ！」  
神のみぞ知る、と現れたときと同じ、朗らかな笑顔を見せた。

（取材・文／北島由記子 写真／永井守）

